目白大学　人文学研究
第4号　2008年　183－200

「あたし」考

A Note on Pronoun “Atashi”

山西正子　山田繭子
(Masako YAMANISHI　Mayuko YAMADA)

キーワード：「あたし」、アイデンティティ管理、漢字表記
Key Words：“Atashi”, Representing indentity, Transcription in kanji

【目次】

0　問題のありか
1　現代語の「あたし」
2　「あたし」の変遷
3　J－POPの「あたし」
4　おわりに

引用にあたっては、ルビを最小限に留め、旧字体の一部を新字体に、会話文の文末のとじかぎを句点（。）に改める、などしている。また新聞は朝日新聞東京本社版による。

0　問題のありか

0.1　「あたし」の共通理解

『日本国語大辞典』第二版（2000小学館）の「あたし」は、（「わたし」の変化した語）自称。
　　主として女性が用い、ややくだけた語感を持つ。

とされ、用例は、『浮雲』（1887初出）から示される。これは、

（1）そのまた悪い文三の肩を持ってサ、私(あたし)に喰ッて懸ッた者があると思召せ。

（2）喰ッて懸らなくッてサ・・・私(あたし)はも最(も)う〜腹が立て〜〜〜堪らなかッたけれども〈略〉　（『二葉亭四迷全集』第一巻57ページ）

の、漢字表記「私」に付されたルビ「あたし」である。話し手は、文三の叔父園田孫兵衛の妻お政。18歳になるお勢の母だが、出自は、「お擦りからずる〜の後配、歴とした士族の娘と自分ではいふが・・・チト考へ物」とされる。

『日本国語大辞典』第二版（2000小学館）の「主として女性／ややくだけた語感」に合致するところである。

やまにしまさこ：外国語学部アジア語学科教授
やまだまゆこ：西東京市図書館司書

さて、現在、この説明は、現在でも100パーセント有効であろうか。

「女性語」には「主として」との条件がつくが、男性使用は「例外」なのか「少数派」なのか、「ややくだけた語感」とは状況によるのか個人によるのか、など確認しておきたい。

0.2　男性の「あたし」

たとえば、「落語」の世界。「横町のご隠居」のほか、登場人物はしばし「あたし」を使用する。そして落語家自身が「あたし」を使用しても、違和感はない。むしろ「落語家らしさ」が印象づけられる。古今亭志ん生の生前インタビューの例もある。

（3）あたしの前では愚痴ひとついわない。歯ァ食いしばって、涙も向こうをむいて拭って、頑張ってきた。　（愛の旅人　2006.4.22　朝刊b2面）

また、下町の職人の雰囲気と男性の「あたし」との違和感もないといえる。「職人の心意気」が感じられることもある。フォークシンガーなぎら健壱のばあい、

（4）あたしは何げなく彫刻の金のエンブレムに目をやった。

（酒にまじわれば　2007.8.22　朝刊27面）

のような「あたし」の用法があるが、なぎらは、東京下町で生まれ育ち、普段から下町の職人言葉のなごりを感じさせる人物であることはテレビなどでよく知られている。

このように見てくると、現代語の「あたし」は、時には、話し手の「自分らしさ」の主張のために、「あえて／意図的に」使用されることもあるのではないか、との推測が生ずる。

0.3　J－POPの「あたし」

このことは、近年のJ－POPの歌詞においても、顕著な事実といえる。

まず、なぜJ－POPか。現代の日本において、「あたし」がどのように用いられているか、稿者山田（1970年代生まれ）はいくつかのメディアでの使用例を観察した。中でもその使用に特徴が見られたのが、「音楽メディア」であった。

音楽メディアを観察の対象とした理由は、日本社会において、「音楽」が個人の日常生活に深く浸透しており、アーティストが若い世代を中心としたリスナーに与える影響も大きく、社会現象になることもあり、大衆にとって非常に身近なメディアであることが挙げられる。こうした音楽メディアの中でも、歌の歌詞は、実際の言語生活や世相を反映するものとして、調査対象として有効ととらえた。

音楽にも様々なジャンルがあるが、稿者が注目したのは「J－POP」と言われる日本の商業音楽である。

なぜJ－POP以外のジャンル（洋楽など）を対象から除外したかというと、日本語の自称詞の使用を調査する目的であるため、歌詞は日本語であることが必須であり、また翻訳は訳者の二次的な解釈が入るため、対象としてふさわしくないと考えたからである。また、従来の日本の演歌などは、紋きり型の表現が多く、使用される自称詞が比較的固定化しているため、除外

した（もちろん後述するJ－POPにも紋きり型の表現は見られるが、他ジャンルと比較すると自由度が高い）。

近年J－POPは、商業音楽の中心であり、他ジャンル（クラシック等）を圧倒する非常に広いマーケットを持っている。「オリコン」などのヒットチャートを見ても、上位を占めるほとんどの曲がJ－POPであることに気づく。

ただし、近年の傾向としては、こうした曲が長期的にヒットしつづけることは稀であり、入れ替わりの激しさが特徴である。昔と比べて、リリース頻度も高く、リスナーに飽きられる前に、いかに新譜を発表するかという作り手側の意図が見て取れる。また、レンタルCDショップの普及や、コンピュータを使っての音楽ダウンロードの一般化など、安価に新譜を入手する手段が増えることにより、J－POPに対して、リスナーの「使い捨て」感覚が強くなってきているのではないかと推測できる。

こうしたJ－POPの傾向を簡単にキーワードで表すならば、「大衆化」、「今日性」、「寿命の短さ」などがいえるのではないだろうか。

このようなJ－POPの歌詞には、現代女性の生の姿に近い自己像が、表現されているのではないか。そこで、稿者（山田）の考えるアイデンティティ管理の観点から、女性アーティストによるJ－POPの歌詞を見直しておく必要があることに気づいた。

詳細については、**3　J－POPの「あたし」**で述べる。

1　現代語の自称詞

1.1　現代語の「私」と「あたし」

現代語では、自称詞は漢字「私」で表記されることが多い。日刊紙では、連載小説などの会話文を除けば、基本的には「私」以外の表記を見ることは多くない。

「朝日新聞」の例でいえば、「あたし」は確認できない日がしばしばあり、「わたし」は日によっては数例確認可能なことがあり、漢字表記「私」であれば、毎日相当量を目にする。すなわち、主力は「私」、時に「わたし」、まれに「あたし」との印象をもつ。

以下、かな表記であれば一般的には「わたし」が使用される中で、「あたし」はいかなる意図があるかを考える。

たとえば、作家室井佑月のばあい、

（5）ここだけの話ですが、あたしも職場に好きな人がいます。〈略〉現実、あたしが一番大切なのは息子。　（相談室　2007.9.1　朝刊33面）

これは、飾らないありのままの姿で、相談者に語りかけていることを強調しているかの印象がある。

ちなみに、同じ室井佑月が福田首相就任までの政治問題に発言する時は、

（＊）本当に気持ちを込めた彼なりの言葉なのか、私はしっかり見届けたい。

（私の視点　2007.9.27　朝刊15面）

のように「私」である。「あたし」の表現価値は看過できない。

ただし、連載小説の会話文では、主として「私」を使用する作品にも「あたし」が散見される。荻原浩『愛しの座敷わらし』（朝日新聞夕刊連載小説　2007）を見る。（6）は中学生梓美の、狼狽している父親に向かっての心中語、（7）は祖母の、（8）は近所の老女の発話である。

（6）妙なことを口走っているのはそっちだ。あたしゃ、むしろ、アンタの精神状態が心配だよ。（2007. 8. 16　夕刊7面）

（7）あたしも大福を渡したことがあるんだよ。〈略〉（2007. 9. 3　夕刊11面）

（8）んにゃ、あたしは八十五年、ここに住んでるども、〈略〉（2007. 9. 15　夕刊10面）

著者荻原の感覚では、気取らない状況では「あたし」も許容される表現と見なされているのではないか。

1.2　現代語の「わたし」

ひらがな表記の「わたし」は、「あたし」に比して、確認が、やや容易である。男性も使用する。

（9）18歳、一児の母。わたしは幸せ、よそ見はしない

（記事「女と男」見出し　2007. 8. 10　朝刊29面）

（10）お手紙の最後を読み、わたしはある映画を思い浮かべました。

（北村薫「たまには手紙で」2007. 8. 12　夕刊10面）

（11）まぁ、わたしのこのコメントでも、「そんなこと分かっているわ」という方もたくさんいらっしゃるとは思いますが〈略〉

（友近「非科学的ニンゲン学　友近独断場」2007. 9. 1　夕刊7面）

（12）わたしの両親も、兄たちでさえも、この戦争を生きた。沖縄戦、広島と長崎の原爆投下、わたしが生まれたのはその5年後でしかない。

（松沢哲郎「たいせつな本」2007. 9. 9　朝刊9面）

9歳の小学生の投書にも「わたし」がある。

（13）投書では、わたしが考えもしなかった「教育再生」のことを書いた中学生の投書や、わたしと同じ小学生の投書もあり、すごいと思った。（2007. 9. 4　朝刊14面）

1.3　国語教科書の「わたし」

前項（13）の小学生の「わたし」については、教科書の影響が考えられる。

現在の教育の世界では、漢字「私」については、音読み「シ」と訓読み「わたくし」しか認めていない。そして、漢字「私」の配当学年が6年であることから、自称詞「私」は小学生段階では使用しにくいことになる。「私」と表記すれば「わたくし」と読むことが求められる状況になるからである。

以下、東京書籍の国語教科書（平成17年用『新しい国語』）による状況を記す。この教科書では、漢字「私」は6年上巻で「私的な手紙」を示し、「してき」と読ませるのみである。

自称詞としては、男児は「ぼく」、女児は「わたし」で一貫している。

６年上巻掲載の文学作品（今西祐行『ヒロシマのうた』）中の、15歳の少女の「あたし」は例外である。

（＊）「あたし、お母さんに似てますか?」

そして、この物語の語り手である元兵士も、少女の養母も「わたし」を使用している。

極論すれば、漢字「私」は、学校教育の場では、読み方は「シ」と「わたくし」であり、これが徹底すれば、「わたし」に該当する漢字はないことになる。「わたし」はひらがなで表記せざるをえない。

繰り返しになるが、前項（13）の小学生の投書の「わたし」は、漢字教育の影響下にあることが考えられるのである。

1.4　現代語会話文の自称詞

上述のように、会話文以外の、書き記される自称詞は、基本的には「私」、また小学生の教科書では「わたし」である。

文学作品などに書き記される会話文の自称詞の状況についても概観しておく。「あたし」「わたし」を書き分ける作品もあるが、基本的には漢字表記「私」ですませてしまうケースが多いことを指摘したい。

1.4.1　『華麗なる一族』の「私」

山崎豊子『華麗なる一族』（1973初出）には、富裕階層の日常生活が、相当量描写される。登場人物は、銀行家一家を中心に、旧華族出身者、終戦直後にアメリカ留学をした高学歴女性、船場出身の社長夫人、外交官夫人、銀行頭取の令嬢など、多彩である。

ここでは、男性の自称詞は、「私」のほか、家庭内や親しい間の「僕」、男児の「ぼく」も多い。また高齢者や政界人の「わし」もあって、画一的ではない。

また、対称・他称についても、男女とも、基本的には「あなた」だが「お前」「君」もあり、「あんた」や「専務」「お母さま」など多様である。

しかし、女性の自称詞については、原則として、漢字「私」で表現するのみである。

例外を掲げる。

関西方言の料亭の女主人には「わて」を使用させる。

（14）さよでおます、それにわては、何というてもぼんぼんのご安産を願うて〈略〉

（上巻170ページ）

また幼稚園児が、父親との風呂遊びの場で「あたし」を使用することもある。

（16）あっ、パパ、あたしのワンちゃん、おぼれそう、助けてあげて。

（上巻431ページ）

このように「私」以外もあるが、基本的には「私」専用の資料といえる。次に示す、フランス留学を誇る外交官夫人の冷ややかな発言（17）も、父親にバーベキューを頼む幼稚園児・・・

（16）に同じ・・・の無邪気な発言も、ともに「私」である。

（17）あら、私、出かけるところでございましたのよ。お時間はどれぐらいかかりまして？
（下巻282ページ）

（18）私は、おえびとピーマン、おねぎは嫌い。　（下巻221ページ）

稿者山西の感覚では、（18）の「私」を、教科書どおりの「わたくし」とは読みにくい。（17）は「わたくし」であることが期待されるのだが。

1.4.2 『トーキョー国盗り物語』の「私」

同様のことは、林真理子『トーキョー国盗り物語』（1992初出）にも見られる。ここでは、東京で働く20歳代後半の女性たちの会話が展開されるが、女性の自称詞は「私」が基本である。

男性の自称詞は「私」「オレ」「僕」がある。対称は男女とも「あなた」が多いが、「お前」「君」もある。状況に応じて、男女とも「あんた」を使うなど多様である。

しかし、女性の自称詞は主人公３人のほか、友人や年長の女性企業家、恋人の母親、高齢の上司夫人のすべてが、「私」である。

（19）馬鹿ね、自分のことを考えてみなさいよ。あんたってこっちがいらいらするぐらい、つまらないことばっかり思っている。〈略〉私、最初はびっくりしたわ。でもね、今はあんたに感心してるところがあるの。　（主人公の間の会話68ページ）

（20）私もここへ来ると、九時過ぎまで眠ってしまうのよ。でも今朝は、主人がゴルフに出かけたもので、おつき合いして早起きしてしまったわ
（恋人の母親の別荘での発話193ページ）

稿者の感覚では、（19）の「私」を、教科書どおりの「わたくし」とは読みにくい。「あんた」との調和を欠くからである。一方、（20）は他の描写から「わたくし」・・・あるいは「わたし」かもしれないが・・・と理解できる。

この1.4.1、1.4.2のような例にであうと、漢字表記「私」をいかに読むべきかは、時に、読者の「常識」あるいは「感性」にまかされているかの観がある。

そもそも、作家の主たる執筆意図が、「自称詞の書き分け」にあるとは、むしろ考えにくい。むろん、どうしてもその自称詞が必要であれば、上述の「わて」や「あたし」のような表記をする。現に、『トーキョー国盗り物語』の著者林真理子は、『葡萄が目にしみる』（1986初出、本人の自伝といえる）では、山梨県の女子中学生たち（本人と周辺人物の投影であろう）に、方言と合わせて「あたし」を使用させている。

このように、「やむを得ない」場合以外の、一般的な状況では「私」ですませてしまうケースも多いのではないか。

極論すれば、「私」を一般的な「自称詞」マークとして使用する表記法が現代語では許容されているのである。

さらにいえば、冒頭の（1）（2）の「あたし」の初期の2例とも、「私」のルビであったように、「私」（およびかつての「妾」）の自称詞マークとしての歴史は古い。われわれは、漢字「私」を「わたくし」「わたし」「あたし」、さらには、あえて書けば「ったし」のような、1拍分の無声音を含む3拍語としても理解することが可能ではないか。むろん方言「わて」や特殊な表現「わっち」「あっし」と理解することはできないが。

だからこそ、あえて、かなで「あたし」と表記される時の、作家の意図を考察する意味があると考えたい。

1.4.3 深田祐介『スチュワーデス物語』（1983初出）

ここでは、スチュワーデスとしての訓練中の若い女性たちの自称詞が、ほぼ、漢字「私」と「あたし」で表記される実例を見ておく。

いま、若い女性の、心中思惟文を含む発話文に限って調査する。大阪出身者の「うち」、芝居がかった独り言の「わたくし」を除外すれば、彼女たちの自称詞は、前半部分では「私」が中心で30例（「あたし」は1例）、後半部分では「あたし」が中心で16例（「私」は4例）となっている。著者の「意識改革」の結果か、何らかの出版事情があるのか、「私」と「あたし」の分布が異なる。あえていうならば、前半部分は出会って間もない訓練生生活や指導員に対する発話も含まれるからであり、後半部分は親密度が増して「うち解けた」会話が多いから、ということは考えられる。

しかし、若い女性にとって、「うち解けた」状況での「あたし」がタブーでないことは窺える。

1.4.4 『赤ちゃんをさがせ』の場合

漢字「私」に依存せず、かな表記に徹するものもある。青井夏海『赤ちゃんをさがせ』（初出2001）は、「わたくし」「わたし」「あたし」をすべてかな表記にしている。地の文は20歳代の助産師が「わたし」の視点で展開する。登場する女性たちの自称詞を以下に示す。

50歳の家政婦は来客に対して（21）「わたくし」を、20歳代と30歳代、それに「先生」と呼ばれる70歳の助産師仲間は互いに（22）「わたし」を、若い妊婦はしばしば（23）「あたし」を使用することになっている。そして同じ家政婦が娘に小言を言う時は（24）「あたし」に変わるのである。またマスコミの寵児であるブライダル産業の女性社長は、失踪した夫の行方を心配する私的な状況でも（25）「わたくし」を使用する。これらの用法に、稿者は違和感を持たない。これが現時点での最大公約数的な認識であろう。

すなわち、一般的には「わたし」、幼さ／素直さ／なれなれしさの表現が「あたし」、職業上の謙虚さや社会的に注目されているという、ある意味で相反するかのような自意識の表れが「わたくし」、という図式で整理できる。

（21）とんでもない。わたくしは旦那さまのお申しつけのままに、お手伝いさせていただいているだけでございます。（72ページ）

（22）そういえば先生、わたしね、子だくさんかって訊かれたんですよ　（33ページ）

（23）あつ、ごめんね、ばかなんて。あたしってすぐ口から言葉が出ちゃうのよ。（43ページ）

（24）あたしがこうしてやらなかったら今頃どうなってたと思うの。いつまでたってもそうなのよ、あんたって子は。（92ページ）

（25）わたくし、こうなってみるまで気づかなかったんです。主人のこと何も知らなかったって……。（171ページ）

2　「あたし」の変遷

文学作品中の用例は、あくまでも「創作」である。しかし、実態と大きく乖離しているとは考えにくいし、一部の専門家以外は、これらを通じて、言語イメージを形成していくのである。このような用例の調査が無意味とはいえないだろう。

以下、いくつかの文学作品中の、女性の自称詞を中心に「あたし」を調査する。

過去の文学作品を調査する場合、自称詞は漢字「私」「妾」などで表現されることがしばしばある。この読み方は、ルビ（現在よりはるかに多い、総ルビのこともある）があればそれに従うことになるが、ルビそのものの信頼度も問題となる。

そして、自称詞の書き分けに敏感であるらしい作品と、1.4.1、1.4.2などのように、基本的には漢字表記として、読み方は読者に任せるとしか考えられない作品がある。

その中で、（ルビを含めて）かな表記される「あたし」について概観しておく。作者自身か、編集者か、校注者か、あるいは他のだれか本文に手を加えることの可能だった人物の、少なくとも一人がそう判断し、そして社会に受け入れられている「あたし」である。

2.1.1　『八重桜』の「あたし」

『日本国語大辞典』は「あたし」の例として『浮雲』をあげる。その3年後の田辺花圃『八重桜』（1890）には、「私」「妾」のルビ例のほか、男性の「吾儕」のルビの「あたし」がある。

（26）どうも僕・・・吾儕（あたし）は貴兄の病根がさッぱり知れない、〈略〉彼の破談の事ですが、彼れは吾儕（あたし）だッて好心持ちハ致ませんから〈略〉（122ページ）

この場面は、18歳の弟とその兄の会話である。弟が、婚約が破棄され、情緒不安定になっている兄を気遣つている。この数年後に、兄弟で某国公使とその書記官として赴任する、相応の階層における兄弟間の会話である。

早い時点での、このような、「相応の階層の、男性の、まじめな場面」での、「あたし」も否定できない。

しかし、この作品で顕著なのは、女性が優位な位置に立ち、遠慮のない相手に対する場面での用例である。結婚を控えた思慮に欠ける「令嬢」が同年配の聡明な小間使いに、婚約破棄の相談をする場面の用例（27）（28）、悲運のヒロインすなわち前述の聡明な小間使いが、かつて

の乳母に身の上を語る場面の用例（29）（30）を示す。

（27）妾(あたし)やァお前の様な利発な人ではないから松浪さんの処へ行きたい。（117ページ）

（28）道理も何も分別ません。妾(あたし)は今日御帰りに成ッて云ふ・・・（117ページ）

（29）斯様して自由に此所へ置て下さるハ嬉しいに違ひないが、若様の事も考へるし、妾(あたし)ハ如何為したら宜からうかと思ッて居るの。（125ページ）

（30）妾(あたし)ハ仕合の事ハ有りやァしない。（125ページ）

2.1.2 『不如帰』の「あたし」

徳冨蘆花『不如帰』（1900）は、作者自身による改訂がなされ、表記については軽々には発言できないが、いま、通行の岩波文庫版による。ここでは、女性の自称詞はかな表記が多く「わたし」「わたくし」が一般的である。後半の老婦人の独白部分に漢字「私」もあるが、ルビは一部に付いており「わたくし」である。

「あたし」は幼女、少女の発話に確認できる。18歳の分別のない娘が悔し泣きする場面にも「あたし」がある。（31）（32）（33）の順に示す。新婚のヒロインが夫に対して、また英国留学生であった継母がしばしば「わたくし」を使用するのと対照的である。

（31）あたしね、おとうさま、今日は縫い取りがよくできたッて先生おほめなすッてよ。（39ページ）

（32）あたしうれしいわ、姉さまはもうこれからいつまでも此家にいるのね。お道具もすっかりきてよ。（137ページ）

（33）ほんまにひどい人だわ、ひどいわひどいわひどいわひどいわ、あたしも山木のむすめやさかい、浪子はんなんかに負けるものか〈略〉（32ページ）

ただし（33）は角川書店・日本近代文学大系『北村透谷・徳冨蘆花集』では「妾(わたし)も」であり、いずれかの段階で変更があったことになる。この角川書店本の底本は1900年の民友社版でルビ付きである。（31）は漢字ルビの「妾(あたし)ね」だが（32）はここでもかな表記であった。

2.1.3 『金色夜叉』の「あたし」

尾崎紅葉『金色夜叉』（1902初出）には「あたし」はない。自称詞は漢字「私」であり、ルビに頼るしかないが、「私」のルビは「わたくし」と「わたし」それに男性の「わし」のみである。

ヒロイン鴫沢宮の、恋人の間貫一に対する自称詞「私」のルビは終始「わたし」であり、結婚後の夫富山唯継に対しては「わたくし」となっている。

2.1.4 『あだ花』の「あたし」

森しげ『あだ花』（1910初出）は、作者すなわち森鷗外の二度目の妻の自伝と解釈される。富裕階層の女性の結婚前後が描写される。ここにも「あたし」はない。ここでは、女性の自称詞はすべてかな表記であり、「わたくし」「わたし」のみである。「あたし」はこの作品世界には

存在しなかったのでもあろうか。結婚前後の姉とその妹はたがいに「わたし」を使用し、新婚の妻は夫に「わたくし」「わたし」を併用する。ヒロインの嫁ぎ先の、まだ学校に通っている、おもちゃ遊びの好きな年頃の妹も「わたし」である。

2.1.5 『空薫・そら炷』の「あたし」

大塚楠緒子『空薫・そら炷』（1908初出）は、「やがては男爵を授けられようか」という家族を描写する。ここでは漢数字以外は総ルビで、女性の自称詞は、漢字「私」である。ルビのほとんどが「わたくし」「わたし」であり、「あたし」は2例、いずれも、19歳の善良だが思慮不足と説明されている、この家族の縁続きになる女性の発話である。なお、（35）では「あたし」と「わたし」が一続きの発話に共存していることになる。

（34）オホゝゝゝ可笑いわ、私（あたし）聴いて居いて可笑くなつちやつたわ、オホゝゝゝ。

（299ページ）

（35）あゝ、私（あたし）、忘れて、それはお手紙よ。〈略〉私（わたし）が頼まれましたの。

（319ページ）

2.1.6 『明暗』の「あたし」

上述の2.1.2から2.1.5までは主として富裕階層の夫婦が描写され、相応の地位にある妻たちは、夫に対して「わたくし」や「わたし」を使用することになっている。

ところが、夏目漱石の『明暗』（1917）では様相が変わる。富裕ではないが、家事使用人のいる、恵まれた境遇の新婚家庭が描写される。

呉少華（2006）によれば、ここでの、女性の自称詞は、「わたくし」82例、「わたし」37例、「あたし」202例で、「あたし」優勢である。

『漱石全集第七巻明暗』（岩波書店）によれば、これも漢数字以外は総ルビであるが「あたし」はかな表記で、作者の意図が反映されていると見てよい。

23歳の「お延」は、主人公である30歳の夫津田に対して（36）（37）のように「あたし」を使用する。しかし、話題の進行に従って、（38）のように一続きの会話でありながら、ルビ「わたくし」付きの「私」が出現する。妻は、話題が、夫の入院のために芝居見物が困難になったことに及ぶと「わたくし」に、いわば「豹変」する。

（＊）は津田が譲歩する発話であるが、（39）（40）のように「お延」の「わたくし」は、もはや変わらない。（37）から（39）までは、（37）の次に地の文1行を挿んで、一気に交わされる。

（36）でもあたし行きたいんですもの。　（13ページ）

（37）嘘よ。あたし芝居なんか行かなくつても可いのよ。今のはたゞ甘つたれたのよ。

（14ページ）

（38）何だつてそんな六づかしい顔をして、あたしを御覧になるの。・・・ 芝居はもうや已めるから、此次の日曜に小林さんに行つて手術を受けて入らつしやい。それで好い

でせう。岡本へは二三日中に端書を出すか、でなければ私が一寸行つて断つて来ますから。（14~15ページ）

（＊）御前は行つても可いんだよ。折角誘つて呉れたもんだから。（15ページ）

（39）いえ私も止しにするわ。芝居よりも貴方の健康の方が大事ですもの。（15ページ）

（40）ぢや芝居はもう御已めね。岡本へは私から断つて置きませうね。（17ページ）

そして、状況が変わると、お延はまた「あたし」にもどる。

（41）たゞ出して見たのよ。あたし此帯まだ一遍も締めた事がないんですもの。（19ページ）

（42）さうね、だけど念の為だから、あたし一寸見て来るわ。（20ページ）

呉少華（2006）が、津田の妹「お秀」について指摘する、「あたし」から「わたくし」への変化は、お延についても言えることである。

呉少華は、漱石の自筆原稿で、お秀の自称詞が「あたし」から「私」に変更された箇所に着目し、「わたくし」のもつ、ある種のポライトネス意識に注目する。すなわち、「お秀」の、兄夫婦への「怒り、嫉妬、無念、他人行儀」などの複雑な感情を、「あたし」を「わたくし」に変えることによって表明する、と判断している。

しかし、お秀は「マイナス」の状況で常に「私」を使用するのではない。以下、一続きのお秀と津田の会話で確認する。漱石によれば「僻見で武装された」お秀の発話である。

「あたし」には、親しい間柄の「感情の、正直な吐露」もある。

（43）兄さんのお腹の中には、あたしが京都へ告げ口をしたといふ事が始終あるんでせう。

（＊）そんな事は何うでも可いよ。

（44）いゝえ、それで屹度あたしを眼の敵にして居らつしやるんです。（以上329ページ）

このように、津田の妻と妹、若い女性２人は基本的には「あたし」を、さまざまな場面で使用することになっている。それが、数字的に「あたし」優位となっているのである。漱石の感覚としては、「わたくし」と「あたし」の乖離は絶対的なものではなかったであろう。同一人物が状況によって使い分ける、しかも同じ相手に同一場面で「豹変」しうることも可能な、「近い」存在であったのではないか。漱石に、「あたし」への排除意識はなかったのではないか。

呉少華のいうように、「わたくし」には、相応の表情がある。**1.4.4**でいえば、（21）は使用人としての慎み深い態度を、（25）は社会的地位があると思いこんでいる「セレブ」の矜持を示す。しかし、漱石のばあい「あたし」にも複数の表情がある。「あたし」は、相応の教育を受けた、知性に欠けてはいない、若い女性の日常語として位置づけられている。

2.1.7 『草の花』の「あたし」

2.1.6で見た、相応の教育を受けた、知性に欠けてはいない、若い女性の、「取り繕わない／

正直な」日常語としての「あたし」の系譜は、福永武彦『草の花』（1954初出）にも続く。

千枝子は20歳の女子大数学科学生、キリスト教に親しみ、音楽などにも関心のある、「明るい」「無邪気／快活」な女性である。亡兄の友人で、好意を示してくれる青年汐見（大学卒業後、語学を生かしてイタリア関係の文化団体に勤務している）に対して、「あたし」で語りかける。時には沈んで悲しげに見えることもあるが、その場面でも「あたし」である。

なお、千枝子の母は「わたし」、千枝子の書簡は「わたくし」である。福永の「あたし」意識は看過すべきではないだろう。

（45）そりゃあたしだって、際物を書く人よりは偉いと思ってよ。

（46）そうかしら?あたしには、好きこのんでああいう生活をしているとしか思えないわ。
（以上164ページ）

（47）あたしは、汐見さんのようにはなれないわ。（168ページ）

2.2 「あたし」概観

以上、漢字「私」が多い中から、ルビをも含めて「あたし」を概観した。知的環境にある男性の用例もあり、また、幼女のほか、相応の教育を受けた女性の用例もある。「あたし」の多面性が見える。少なくとも、夏目漱石や福永武彦は、「あたし」を排除していない。

次に**3　J－POP**の「あたし」において、現在、むしろ積極的に「あたし」を使用するジャンルがあることを確認していく。

3　J－POPの「あたし」

近年のJ－POPの歌詞において、「あたし」が使用されている例を調査した。

以下に詳細を述べる。

3.1　調査対象

アーティスト名（アルバムタイトル）

①aiko（「夏服」）

②大塚　愛　（「LOVE　PUNCH」）

③椎名　林檎　（「勝訴ストリップ」）

※①～③の選定理由について

前提として、自ら作詞作曲を手がける女性シンガーソングライター（個人）であること。＝自身の言語使用が作詞に反映し、詞の世界がアーティストのアイデンティティと結びついている。

この前提条件を満たしたアーティストのうち、以下の要件にあてはまった３名を選定し、アルバムは2000年以降発表されたものを対象とした。

・社会的認知度（第56回（2005年度）紅白歌合戦出場歌手）

・人気度（インターネットサイト[1]による投票結果）
・特定のイメージにもとづいた支持（インターネットサイト[2]による投票結果）

3.2　調査結果

①アーティスト名：aiko
アルバムタイトル：「夏服」
発表：2001年
収録作品：全11曲

	作品名	自称詞	使用回数	用例
1	飛行機	あたし	6	あなたもあたしも少しずつ大人になって
2	be master of life	あたし	8	あたしがそばにいてあげる
3	ロージー	あたし	4	あなたとあたしは恋人なのよ
4	密かなさよならの仕方	あたし	4	あたしは大きな声であなたにさよなら言おう
5	終わらない日々	あたし	5	あたしはあなたと逢う為だと知ってるもの
6	心日和	あたし	2	あたしまた泣かなくちゃいけないじゃない
7	September	あたし	6	雲は晴れないあたしの真上
8	雨踏むオーバーオール	あたし	3	あたしはあなたに見返りを期待してたかな？
9	アスパラ	あたし	6	あの子の前を通り過ぎてる事であたしに気付いて欲しくて
10	ボーイフレンド	あたし	4	あなたがあたしの頬にほおずりすると二人の時間は止まる
11	初恋	あたし	6	悩んでるあたしはだらしないな

②アーティスト名：大塚　愛
アルバムタイトル：「LOVE　PUNCH」
発表：2004年
収録作品：全11曲

	作品名	自称詞	使用回数	用例
1	pretty voice	僕	5	君がいる　そばに　いつもいる　僕も
2	桃ノ花ビラ	あたし	1	きっときっと…あたしを届ける
3	さくらんぼ	あたし	5	隣どおし　あなたとあたし　さくらんぼ
4	GIRLY	あたし	11	今　あたし　あなたのそばにいるコト　確か
5	雨の中のメロディー	あたし	1	まるで、あたし、捨てネコ　みたい…。
6	しゃぼん玉	僕ら	4	あの頃の僕らは　雲のない世界
7	石川大阪友好条約	×	0	
8	片想いダイヤル	あたし	6	あたしの片想い　冷たく　もっと冷たく
9	ハニー	×	0	
10	甘えんぼ	あたし	6	１人で大丈夫と　強がるあたしは　なんだかかわいそう
11	Always Together	×	0	

③アーティスト名：椎名　林檎
アルバムタイトル：「勝訴ストリップ」
発表：2000年
収録作品：全13曲

	作品名	自称詞	使用回数	用例
1	虚言症	あたし	4	あたしは何時もボロボロで生きる
2	浴室	あたし	4	今日は特別に笑ってばかりのあたしは丁度
3	弁解ドビュッシー	あたし	3	どうせあたしの人生　語呂合わせなんだもん
4	ギブス	あたし	5	あたしは何時も其れを厭がるの
5	闇に降る雨	あたし	1	東西線はあたしを乗せても新宿に降ろしてくれなくて
6	アイデンティティ	あたし	4	あたしは誰なのですか
7	罪と罰	あたし	2	あたしの名前をちゃんと呼んで
8	ストイシズム	×	0	
9	月に負け犬	僕	4	只　伝わるものならば　僕に後悔はない
10	サカナ	あたし	3	あたしが足の指五本　踵一個
11	病床パブリック	×	0	
12	本能	あたし	1	あたしの衝動を　突き動かしてよ
13	依存症	あたし	4	あたしが此のまゝ海に沈んでも

注：用例の表記（分かちも含む）は、歌詞カードに倣った。

3.3　用例と分析

今回調査した３人のアーティストの中で、最も「あたし」の使用頻度が高かったのが①aikoであった。上記の「夏服」というアルバムでは、収録作品11曲全ての自称詞が「あたし」であり、また、2006年リリースされたベストアルバム「彼女」でも、収録14曲全てで「あたし」が使用されていたのである。

aikoは、1975年生まれ。aiko節といわれる独特の歌唱スタイルもさることながら、彼女の作り出す歌詞やメロディは、多くの女性たちの共感を得て、支持された。2005年、2006年と過去２年連続で、オリコンの「好きなアーティスト」１位にも選ばれている。

彼女の作品のほとんどは恋愛をテーマにし、恋のせつなさや、気持ちの高揚、恋愛で得られるパワーなどを、巧みに表現する。恋の辛さ、苦悩などを綴った歌詞もあるのだが、それでも彼女は、恋愛を肯定し、女性として恋をしている自分を謳歌していているように感じとれる。

テレビなどで見るaikoは、Ｔシャツにジーンズなど、ラフなファッションに身を包み、美しいというよりはどちらかと言うと、親しみやすいルックスである。従って色気を感じさせるタイプではないが、かといって、中性的（ボーイッシュ）なキャラクターで売っているわけではない。

男性に媚びるような女らしさはないが、女性的な感性を否定していない、という絶妙なバラ

ンスの印象を与えている。そのバランス感が、女性からの支持につながっているものと考えたい。

「夏服」の収録作品にみる「あたし」の使用例をいくつか挙げてみる。

後ろ振り向かずに歩く事
あたしは何があっても生きる
誰が何を言おう関係ない　あたしは味方よ
そんなの当たり前の話よ
あたしもずっと意地も張ってられないから
たまにはそばにいて欲しい

（「be master of life」より）

前半で、前向きで自立した女の子像を表現し、ラストの２行で「あたしもずっと意地も張ってられないから、たまにはそばにいて欲しい」と素直な甘えの本音を見せる。

遠くからじっとこらえて見つめているようじゃ
幸せもきっと逃げてゆくわ
だからあたしはあなたに言ったのよ
「生まれた時からずっとあなたに抱きしめて欲しかったの」

（「ロージー」より）

前半では、待つ女から一線を画すように、能動的な姿勢を見せ、最後に「ずっとあなたに抱きしめて欲しかったの」とストレートで飾らない甘えの心情が吐露される。

このように、aikoの歌詞の世界では、恋やふたりの関係性に前向きで、時に重要な場面では素直で飾らない自分を表現できるという女の子像が「あたし」という自称詞の使用により、より補完されているのではないかと仮定できる。

3.2にみる「あたし」の使用状況を、稿者山田は次のように分析する。

1　現在人気のある女性アーティストの歌詞の中で「あたし」の使用頻度が高い傾向にある。

2　1の要因について、次のように仮説を立てる。

①　アーティスト本人の日常語彙の反映

②　「あたし」の持つイメージ（甘え、かわいらしさ、親近感、感情の吐露等）によって、リスナーの共感、支持を得ることに成功している。歌詞の世界に、自分を投影する役割の一つとして機能する。

③　中立の「わたし」に対して、「あたし」を使用することによって、近田春夫（1998）

のいう「女のオーラ（あるいは気配）」を伝える効果を発揮する＝「音楽の文体」の創造。

④　現在では、若い世代を中心に言語上の性差が縮まってきている。終助詞の使用にその傾向が顕著である。現実の言語生活が歌詞の世界にも反映されていると考えれば、歌詞の世界も中性化＝無標化しているのではないか。アーティストが、自分のアイデンティティ表明の場である歌詞の中で、有標の自称詞である「あたし」を多用しているのは、終助詞の使用など、それにかわる言語上のアイデンティティ表明の手段がなくなってきているからではないか。

3.4　まとめ

「あたし」は、口語的な性格が強いため、特に公的な活字メディア（新聞・雑誌等）での使用例はそれほど多くない。それと比較すると、音楽メディアでは、より私的な表現が許容されるのか、J－POPの女性アーティストの歌詞にみる「あたし」使用頻度の高さは突出していると感じられる。

今回見てきた歌詞の中で、「あたし」が使用されている全ての例で、「わたし」が使用され得る場面であったにも関わらず、あえて「あたし」が使用されている。そこにはアーティストによる、「あたし」使用の意図（意思）が存在すると考えられる。普段着の自分、素直で可愛らしい自分を伝えようとする女の子の意識が見て取れる。

今回調査した女性アーティストの歌詞には、いずれも若い女性の感情が歌われていた。それは借り物の表現（例えば、中年の男性作詞家が10代の少女の心情吐露を歌詞にするような）ではなく、等身大でかなり血の通ったものである。

稿者は、これらの歌詞にみる「あたし」に、同世代の女性として違和感を感じない。彼女たちが、いずれも男性のみならず女性ファンの支持も受けているということも、それを裏付けるものではないだろうか。

J－POPの「あたし」は、女性という特性をアピールしながらも、同性に反感を買うほど過剰に女らしすぎず、素直な、飾らない女の子という絶妙なイメージを印象づけている。まさに、「あたし」が、アイデンティティ管理の手段として機能している顕著な例と考えられる。

4　おわりに

記録にとどめられてから100年余りの「あたし」が、初期の守備範囲を狭めつつも・・・男性語としては、相応の知的階層の男性も使用した痕跡があるが、現在は、一定の職域などに限られやすい・・・、女性語としては、様々の表情をもち続け、時には「女性の、ありのままの素直さ」を表出する、アイデンティティ管理の手段ともなり得ていることを述べた。

背景として、言語における性差が縮小し、殊に終助詞を含む文末表現では「女性らしさ」を明示しにくくなった、その代替手段として、大きく「女性」側に傾いた「あたし」が選択され

るみちすじを想定した。

最後に、「あたし」が記録され始めた1900年前後に生まれ、時代の先駆者であった女性たちの、1996年から1997年にかけての発話を見ておく。彼女たちはこの時点で90歳以上、いずれも、然るべき学問的・社会的訓練を受け、相応の見識を備えた人物として評価されている。彼女たちは、しばしば、「あたし」を使用するのである。

「あたし」が女性たちの「素直な自分」を伝える手段であり続けたと思わせる例が、このように残っているのであった。以下『颯爽たる女たち』の記録による。

（48）この山荘もあたしが自分で設計してインテリアして庭もみんな考えたんですよ。
（料理研究家飯田深雪　1903年生まれ）

（49）なんでもあたしは10月15日生まれってことになってるけど、九月に生まれてるらしい。
（元熊谷組通訳川畑登衆　1902年生まれ）

（50）（夫の死後職業に就いたことを）あたしは、家出したノラがどういうふうに生きていくかを、やろうとしたわけよ。
（婦人運動家櫛田ふき　1899年生まれ）

（51）あたし、まだ生まれてから今まで喧嘩ってしたことない。
（登山家黒田初子　1903年生まれ）

（52）あたしね、1000年ぐらい生きたみたいな感じ。まだ九六年と何ヶ月だけどね。
（元読売新聞記者、『女人芸術』創刊者　望月百合子　1900年生まれ）

【注】

（1）（J－POP MUSIC PROGRAM FAN SITE）MUSIC TVによるアンケート「好きなアーテイスト（女性編）」の上位４位に入る（①aiko　②椎名林檎　④大塚愛）。総投票数：502

（2）同上による、「可愛い女性アーティスト」の同票１位（aiko・大塚愛）総投票数：631、「格好いい女性アーティスト」４位（椎名林檎）総投票数：559

【引用作品一覧】

青井夏海『赤ちゃんをさがせ』　創元推理文庫2003発行
遠藤織枝ほか『颯爽たる女たち』　まんぼう社1999発行
大塚楠緒子『空薫・そら炷』　『明治女流文学集（一）』明治書院1966発行
尾崎紅葉『金色夜叉』　『尾崎紅葉集』明治書院1965発行
田辺花圃『八重桜』　『明治女流文学集（一）』明治書院1966発行
徳冨蘆花『不如帰』　岩波文庫1971改版発行
夏目漱石『明暗』　『漱石全集第七巻』岩波書店1965発行
林真理子『葡萄が目にしみる』　角川文庫1986発行
『トーキョー国盗り物語』　集英社文庫1995発行
福永武彦『草の花』　新潮文庫1956発行
二葉亭四迷『浮雲』　『二葉亭四迷全集第一巻』岩波書店1964発行
山崎豊子『華麗なる一族』　上・中　新潮文庫1980発行

【参考文献】

呉少華2006 「漱石作品における人称代名詞」（日本語学会2006年度秋季大会予稿集）
近田春夫（1998）『考えるヒット』 文芸春秋

【付記】 本稿は山西、山田の共同執筆である。ただし、**2**については山西が、**0.3**と**3**については山田が分担した。この２項は山田繭子（旧姓岡安）の、平成18年度目白大学大学院国際交流研究科言語文化交流専攻に提出した修士論文の一部に、加筆したものである。

【要約】

本稿では、自称詞「あたし」について、史的変遷を概観し、現代のいわゆるＪ－POPの世界での「あたし」の位置づけを考察する。そして、しばしば「ややくだけた語感」とされる「あたし」が、Ｊ－POPの歌詞としては、「かわいらしさや女性のオーラを伝える」ためのアイデンティティ管理の表現として意図的に選択されることを確認する。

その背景に、現代における、終助詞を含む文末表現に殊に顕著な、言語上の性差の縮小を想定する。アーティストが、自分のアイデンティティ表明の場である歌詞の中で、大きく女性に傾いた、いわば「有標の自称詞」である「あたし」を多用するのは、終助詞の使用など、それ以外の言語上のアイデンティティ表明手段が弱体化しているからではないか。

「あたし」は一般的に「「わたし」の変化したかたち」と説明される。しかし、さらに変化して特化されている「わっち」や「あたい」に比して、いわば「変化の度合いが小さい／「わたし」との乖離が少ない」ために、様々な表情をもち得る。

男性には「おれ」や「僕」などの「わたくし」系に属さない自称詞があるが、一般的にはそれを使用しない女性にとって、「わたくし」「わたし」「あたし」の選択は、時に大きな意味をもつ。

しかるに、現代語では、「わたくし」系の自称詞は漢字「私」で表記されることが多い。日常語の実際の発音習慣が「わたくし」か「わたし」か、さらには「あたし」かを問わず、文字化するときには漢字表記「私」ですませてしまうことが多い。

その中であえて「あたし」と表記するときの表現者の意図に迫り、アイデンティティ管理の手段として「あたし」が積極的に選択されることもある点を指摘したい。